

# 仏教的視点から見た戦争と平和

新井 俊一

(相愛大学人文学部・教授)

## (和文要旨)

拙論は昨今の世界情勢にかんがみ、釈尊・アショーカ王・法然・親鸞の言葉をたどりながら、仏教本来の戦争観・平和観を明確にしようとするものである。仏教は釈尊の時代から平和主義の上に立つ宗教である。争いの元になる自己の中の煩惱性を見つめ、それを解決しながら、自他共に平和で喜びに満ちた人生を全うできるような社会を構築するために努力しようというのが仏教の主旨である。

『宗教と倫理』第3号で南山大学のM. シーゲル氏は「正当戦争 vs. 正義の戦争」で、正戦論がキリスト教の主流だとおっしゃっている。もしそうだとすれば、拙論はシーゲル氏の論文と対照的な内容となるであろう。

2001年9月11日の同時多発テロ以来、世界は平衡を失ったように思える。アメリカを始めとして日本を含めた各国は、ますます「国益」を第一として他国と対立関係に陥ることにためらいを見せなくなっている。私たちはここで立ち止まって、それぞれの宗教の叡智に耳を傾けるべきではなかろうか。戦争をなくす唯一の道は、国際紛争の解決手段としての戦争を否定することである。

## (SUMMARY)

This paper is intended to clarify Buddhism's basic standpoint on the topic of "war and peace" based on the words of Shakyamuni Buddha, King Ashoka, Honen and Shinran. Since its foundation by Shakyamuni Buddha, Buddhism has always been an advocator of peace, even though Buddhists did resort to arms every now and then in history.

Despite occasional misinterpretations and misrepresentations of the Buddha's teaching, Buddhism has hardly ever developed a theory that officially condoned killing. It has been more concerned with how to reduce the possibility of armed conflict. In this sense, this paper will make a good

contrast with Michael T. Seigel's article on Christian "Just War Theory" in the *Religion and Ethics, Vol. 3*, in which he addressed some serious contradictions innate in that theory.

Since the terrorist attack on the U.S. on September 11, 2001, nations in the world seem to have become less hesitant about increasing armaments and resorting to arms to solve differences with other nations. Now that the survival of all life forms on earth is at stake due to man-created environmental deterioration, isn't it about time every one of us should take to heart that the only way to stop war is to deny war as a means of solving international conflict?

## 1. 始めに

20世紀は「極端な時代」であり、工業先進国では科学技術が高度に発達し豊かな物質文明が花咲いたが、開発途上国の多くはますます戦乱と貧困にさいなまれた。また2回の世界大戦とそれ以後の地域戦争によって、未曾有の数の戦争犠牲者が出た。第二次世界大戦後、二度と戦乱が起こらないことを願って創設された国際連合も、大国間の確執によって機能不全に陥っている。第二次世界大戦後、国と国とが宣戦を布告しあって行う古典的な戦争はなくなったが、大国が「国益」や「自衛」を口実にして弱小国に対して行う侵略戦争、民族間の紛争から起こる大量虐殺、大国に挑戦するテロ組織による「非対称」の戦争が後を絶たない。世界にまれな平和憲法を持つ日本も、アメリカの圧力もあって、自衛隊を海外に派兵したり、仮想の非常時に備えた立法を整えたりしつつある。

このような状況にあって、仏教の一信徒として、釈尊や親鸞の、戦争と平和に対する姿勢を探り、それを人々に紹介するのも意味があると思われる。小論はそのような意図で起稿された。

## 2. 「戦争」と「平和」の定義 —積極的平和と消極的平和

「戦争」と「平和」の定義は容易ではない。また、戦争と平和の間に明確な境界線を引くことは難しい。先ず「戦争」は個人間の暴力沙汰や、ギャングやヤクザなどの私闘とは区別される。戦争は、古典的定義に従うと、主権国家が合法的行為として組織的に行う暴力行為である。私闘の場合は、国家によって非合法活動として扱われ、処罰の対象ともされる。もう一つの相違点は、戦争の場合の戦闘員は、国家の構成員であることから来る制度的もしくは道義的義務として参加しているのであって、相手の戦闘員に対して個人的な怒りや恨みはないのに対して、私闘の場合は、双方とも相手に対して明確な動機を持って戦っている、ということである。

さらに内乱について考えると、反乱軍は自己を国家に敵対する対等の組織と自認しており、国家も正規軍を使って鎮圧を試みるから、内乱も「戦争」の範疇に含むことができる。罪のない市民を巻き込むテロ攻撃は、政府側から言うと非合法的な犯罪行為であって、警察が処理すべき問題である。しかし現在アメリカのブッシュ政権が行っている「テロとの戦い」は国家と国軍が関わっているという点で、明らかに戦争である。本来犯罪行為であるテロ活動を戦争と位置づけることによって、アメリカはテロ組織を国家と同等の位置に引き上げていると言える。

次に「平和」の意味について検討すると、単純に戦争行為のない状態を「平和」とは必ずしも言えない。それは平和学で「消極的平和」と言われる状態で、内部に多くの矛盾・緊張・怒りなどの負の圧力を抱えていながら、体制側が抑圧と威嚇によって、暴力の発生を抑えつけている場合である。古代ローマ統治下の Pax Romana、近くはイギリス統治下のインド、日本統治下の朝鮮半島、冷戦下の世界などがこれに当たる。この抑圧と威嚇は軍事力だけで行われるのではなく、擬似宗教的権威の創設による支配の神聖化と正当化を伴うのが普通である。古くはエジプトのファラオ、ローマ皇帝・旧インド帝国皇帝としてのイギリス国王、旧中華皇帝、旧日本帝国天皇、などがこれに当たる。またナチス・ドイツの標榜した「アーリア至上主義」や、旧共産主義諸国の唱えた「プロレタリアートによる反動勢力との戦い」、さらには最近のアメリカの唱える「自由と民主主義のための戦い」なども思想の神聖化による抑圧・威嚇行為である。さらに、性・出身地・家柄・財産・信仰・特定の疾病・傷害などによる社会的経済的差別は「構造的暴力」と呼ばれており、社会不安の大きな要因となる。

これに対して、「積極的平和」と呼ばれるものは、社会的矛盾や国家間の緊張に対処する場合でも、その関係者が互いに敬意を持って漸進的・段階的に問題を解決しよ

うとする努力の過程を言う。そもそも「平和」とは、人間が地球に多く存在することを前提にして使われる言葉であり、人間の死に絶えた状態の地球を「平和」とは呼ばない。しかし人間はそれぞれ自我を持ち、欲望を多く内に秘めた存在である。その欲望は自己の外に向けられる性質のものであるから、人と人の間に利害関係が起こることは避けられない。また国際連合が存在する今でも「国家」が国際関係の基本単位であり、その国家を支配する政府が国家の集団的自我を代表しているから、それぞれの国家が繁栄を計り、天然資源を求める過程において、他国と利害の不一致を引き起こすことは当然の成り行きである。国家間の暴力行為を止めるためには、各国の国民と指導者がまず、暴力を問題解決の手段と考えないことが第一条件である。

戦争を防止することを意図した思想や提案は古い時代から存在し、それらが条約・盟約などに結実した例も多いが、どれも長くは続かなかった。第一次世界大戦後の「国際連盟」、そして第二次大戦後の「国際連合」などは、超国家的な機関を創ろうとした試みであるが、国際連盟は倒れ、国際連合は大国の自己主張の中に機能不全のままである。しかし「ヨーロッパ連合」に見られる国家機能の超国家機関への漸進的譲渡の試みは、新しい平和構築の形として注目される。

### 3. 仏教的視点から見た戦争と平和

ここで立ち止まって考えたいことは、戦争が他の動物に見られない人間特有の行為であり、人間存在の矛盾を余すところなく発揮しているということである。その理由は、戦争は人間に与えられた高度な「理性」を最大限に働かせるけれども、その理性は人間存在の奥深くに渦巻く欲望、野心、我執、怒り、破壊欲などの「反理性」、すなわち煩惱、の上で展開しているからである。おおかたの印象に反して、戦争は冷徹なほど「理性的」な活動であることに注意する必要がある。

古来、「正義の戦争」「平和実現のための戦争」「戦争防止のための戦争」という名目で多くの戦争が引き起こされてきた。そもそも国家が行う戦争は、その国家から見ればすべて「正義」であって、自分が間違っていると思って戦争を始める国はない。

仏教的観点から言うと、個人間の暴力は自我と自我の衝突より起こり、国家間の暴力は集団的自我の衝突より起こる。どちらも自己の「正義」や「正当性」以外に目が向かないからこれを「無明」という。この観点からすれば、人命と財産を無差別かつ大量に破壊する戦争はすべて悪であり、「よい戦争」や「正義の戦争」は一つもない。

争いと争いの終息について、釈尊の言葉を伝えていると言われる『法句経』は次のように言っている。

彼は私をののしった、私を打った、私を打ち破った、私のものを奪った、  
このような考えを持つものには、恨みは決してやまない。(3)

彼は私をののしった、私を打った、私を打ち破った、私のものを奪った、  
このような考えを持たぬものには、恨みはやむ。(4)

いかなる時にも、この世では、恨みは恨みによって静まることはない、  
恨みなきによってこそ恨みは静まる、これは永遠の真理である。(5)

(S. Radhakrishnan, *The Dhammapada*, pp. 59-60. 日本語訳は新井)

釈尊の言おうとすることは、報復は争いの火に油を注ぐだけであり、争いを止める唯一の方法は、紛争解決の手段として争いを否定することである、ということであろう。

大乘仏教の菩薩行である「六波羅蜜」の一つに「忍辱」があるが、これはいかなる侮辱や迫害にも怒りを起こさずに耐えることである。究極的にはこの生活態度は、自分の命が危険にさらされても相手を哀れんで反撃しない絶対非暴力に至る。これに関連して原始経典に次のような話がある。仏弟子ブンナはもともとインド西海岸の繁栄した商人であったが、事業を投げ出して仏陀に帰依した。自らの成道後、ブンナは釈尊に法を伝えるために故郷に戻ることを願い出た。その時ブンナは釈尊に、たとえ自分が罵られても、棒で打たれても、鞭で打たれても、剣で刺されても、命を奪われても決して怒らないで相手を感謝の念で受け入れる覚悟であると言う。その時始めて釈尊は、「行けブンナよ。汝まず解脱して、他人を解脱せしめよ。自ら救われて、他人を救え。自ら安心を得て、他人を安心せしめよ。自ら安らぎを得て、他人をして安らぎを得しめよ」と言っている(中村元『釈尊伝 ゴータマ・ブッダ』、pp. 293, 296)。

しかしこれは修行僧が成道に至るための理想的な非暴力の道であり、普通の社会生活を送るものにこれが実践できるとも思えない。強盗に入られて自分の妻や娘が陵辱されそうなときに、非暴力だなどと言っていられないことも確かである。また自国が他国によって一方的に侵略され、平和的手段を講ずる余地がない場合、自衛のために武器を取ることもやむを得ないであろう。しかし仏教的観点から言えば、これらの場合でも、暴力の使用は「悪」であり「罪」であり、慚愧すべきことである。

#### 4. 仏教が「戦い」を語る場合

仏教の経典にも戦いや勝利を表す言葉が多く現れるが、それらは例外なく、自己との戦いを語っている。個人個人が仏智に導かれて自己を克服するところに自己との平和、他人との平和が達成されると教えている。その状態を「仏果」とか「涅槃」とか言う。

「涅槃」とはサンスクリット語の nirvana であるが、それは「炎を吹き消す」ことを意味する。この場合「炎」とは、「煩惱」を意味する。煩惱の炎を吹き消した状態が涅槃である。これは単純に肉体の死を意味するものではなく、大乘仏教では、自己の命の目的が全うされ、同時に他の命をも輝かせた状態を言う。言い換えると、涅槃は死の中にあるのではなく、生死への執着を乗り越えるところにあるのである。

煩惱とは普通、「<sup>とんよく</sup>貪欲、<sup>しんい</sup>瞋恚、<sup>ぐち</sup>愚痴」の三毒で代表される。仏教では、闘争の相手(敵)は常に自己の中にある。これを『法句経』では次のように言っている。

戦場にて千人の敵に  
千度勝つものよりも  
ただ一人の敵、自己、に勝つものが  
実に最上の勇士である。(103)

自己を統御し  
常に自制をもって生きるものにとっては、  
自己への勝利の方が、実に、  
多くの他人に勝つことよりも優れている。(104)

神もガンダルバも、悪魔もブラフマー神も  
このように自己に打ち勝ったものの  
勝利を敗北に  
変えることはできない。(105)

(Radhakrishnan 前掲書、p. 94. 日本語訳は新井)

このことは釈尊が自分の人生において証明している。仏伝によると、釈尊の成道は

悪魔を降伏させることを通じて起こった（降魔成道<sup>ごうまじょうどう</sup>）。すなわち、釈尊の成道の直前に悪魔パーピーヤス（波旬<sup>はじゅん</sup>）が現れ、様々な方法で成道を妨げようとした。釈尊が成道をあきらめれば帝王の位を与えようと言ひ、また自分の3人の娘に釈尊を誘惑させようとし、さらに自己のもてるすべての武器と兵士で釈尊を殺そうとした。しかしどれも釈尊の心を動かすことができなかつたと伝えられている。この話は釈尊の中に起こった煩惱—財欲、権勢欲、色欲、生存欲など—との壮絶な戦いを表している。煩惱の本質を見据え、煩惱に完全に打ち勝った時に真の自由、真の勝利が現れたのである。（A. L. Basham, *The Wonder That Was India*, pp. 258, 259）。

仏伝の中に、釈尊の平和論をうかがわせる話がある。釈尊が入滅する何ヶ月か前に、マガダ国のアジャータシャトル王から、隣国のヴァッジ族の国を攻撃し征服することの是非を問われた。すると釈尊は弟子のアーナンダに次の7点を確認してから王に攻撃を思いとどまらせようとしたという。その7点とは：

- (1) ヴァッジ人は、しばしば会議を開き、会議には多数の人が参集する。
- (2) ジャッジ人は、共同して集合し、共同して行動し、共同してヴァッジ族として為すべきことを為す。
- (3) ヴァッジ人は、まだ定められていないことを定めず、すでに定められたことを破らず、往昔に定められたヴァッジ人の法に従って行動しようとする。
- (4) ヴァッジ人は、自分たちの古老を敬い、尊び、崇め、もてなし、そうして彼らの言に耳を傾ける。
- (5) ヴァッジ人は婦女・童女を暴力もて連れだし捉え留めることをしない。
- (6) ヴァッジ人は自分たちの霊地を敬い、尊び、崇め、保護し、そして古来の法にかなった供物を絶やすことがない。
- (7) ヴァッジ人は、真人（尊敬さるべき修行者）たちに正当な保護と防御と支持を与え、今後も真人たちが自分たちの領土を訪れることを望み、すでに来た真人たちが安らかに住まうことを願う。

（中村元、『ゴータマ・ブッダ（釈尊伝）』、p. 179, 180）。

釈尊がここで言いたかったことは、社会の構成員が心を合わせて問題に対処し、一人一人が自己の義務をしっかりと果たし、法に従い、互いに敬い助け合い、弱いものを保護し、古来の伝統と価値観に敬意を払い、智者を保護すれば、国は繁栄し続けるで

あろうし、外敵に侵略されることはない、ということであろう。これは平和学で言う「積極的平和」と共通するものがある。おそらく釈尊としては、アジャータシャトル王にも国を治める理想の姿を示して、国々が戦争をしないで共存共栄を計ることを諭したものと思われる。

この精神は後の大乘仏教にも受け継がれており、『大無量寿経』には次のような文がある。

われなんぢら天・人の類を哀れみて、苦心に誨諭し、教へて善を修せしむ。器に随ひて開導し、経法を授与するに承用せざることなし。意の所願にありてみな道を得しむ。仏の遊履したまふところの国邑・丘聚、化を蒙らざるはなし。天下和順し日月清明なり。風雨時をもつてし、災厲起こらず、国豊かに民安くして兵戈用ゐることなし。 (『浄土真宗聖典』(註釈版)、p. 73)

この意味は、「釈尊が人々の苦悩を哀れみ、各人の器量に従って懇ろに導いてやると、その教えに従わないものはいない。人々はその願いに応じてみな仏道を成就する。仏が立ち寄る国や町、村落は、すべて仏の化導を蒙る。世界は平和で穏やかであり、太陽も月も清らかに明るい。風雨は来るべき時に来て、天災や疫病が起こることはない。国は豊かで人々は平安に暮らし、兵や武器を用いる必要はさらにない」ということである。仏教が広まると、天下は穏やかになり、国は豊かで人々は平安に暮らす、ということであるが、気候まで順調になって、天災や疫病も起こらないというのは、すこし素直に受け取れないところがある。おそらくこれは、天災が起こり、不順な天候が起こっても、人々は助け合って生きているから、被害は最小に抑えられ、人々はそれで怒ったり呪ったりすることはなく、兵乱が起こることはない、ということであろう。またこれを現代に当てはめると、仏の慈悲を人々が深く心にとどめれば、環境問題も起こりにくくなるだろうし、それだけ天災や疫病も起こらなくなり、ひいては争いも起こりにくくなるという意味にもとれる。

上の議論でも明らかなように、仏教精神はどこまでも暴力を否定する。人々の心に働きかけ人々を中から変革しながら、問題が起こっても暴力沙汰にさせない人格を育てるのが仏教の眼目である。その精神を表すものとして、やはり『大無量寿経』に次のような言葉がある。

世間の人民にして、父子・兄弟・夫婦・家室・中外の親属、まさにあひ敬愛してあひ憎嫉することなかるべし。有無あひ通じて、貪惜を得ることなく、言色つねに和してあひ違戾することなかれ。 （『浄土真宗聖典』（註釈版）、p. 55）

これは、「世間の人々は、父子・兄弟・夫婦・家族・父の親属と母の親属、すべて互いに敬い愛し合って、決して憎んだり嫉妬してはいけない。あるものとなないものを融通しあって、貪りや物惜しみをすることなく、言葉と顔色はつねに和らいでいて、決して逆らい背いては行けない」という意味である。このようにすることが、自他・心身ともに平和な生活を築く基になると言うことである。

## 5. アショーカ王の Dharma による統治

ここで仏教精神を指導理念として古代インドを統治したアショーカ王の例を見ることにする。古代インド・マウリア王朝3代目のアショーカ王（阿育王、治世 circa 262-232 BCE）は仏教に帰依し、Dharma（法）によって統治をしたことで有名である。王は今のインドとパキスタンに及ぶ広大な地域に多くの碑文を刻ませ、自己の統治理念を国の官吏および民衆に知らしめようとした。

磨崖碑文第 13 条によると、王は即位第 8 年にインド東南岸のカリングア国を征服した。「15 万人が捕虜として（カリングアから）連れ去られ、15 万が殺害され、その何倍もの人々が亡くなった。」王はそれを深く悲しみ、その戦争後、Dharma を学び、Dharma を愛し、Dharma を宣揚することを誓った。それ以後、王は Dharma 宣揚のための役人を任命して国内各地を巡回させ、国外では遠くヘレニズム世界の諸王にも使節を送って Dharma の宣揚に努めた、という。（Kalinga Edict XIII）

小論の主題である「戦争と平和」に関するものとしては、近隣諸国を考慮に入れて書かれた次のような碑文がある。

人はすべてわが子である。自分の子供たちのこの世と次の世での安寧と幸福を願うように、私は人々すべてについて同じことを願う。わが領域の外にある国々のものたちは、私の彼らに対する意図がどういうものかを知りたく思っているであろう。彼らは私を恐れず、信ずればよい。私がおたらすものは幸福であり、物惜しみではない。また私は、罪を犯した者でも赦さるべき者は赦すであろう。

(Kalinga Edict II)

多くの磨崖碑文および石柱碑文で王が伝えようとしたことは多岐にわたるが、その中でも代表的な理念は、すべての宗教および宗教人に対する敬意、すべての民族、文化、伝統に対する敬意、戦争・暴力の禁止、動物愛護と不殺生、家族間の敬愛、宗教団体（特に仏教サンガ）における内紛と分派の禁止、自制と寛容、道徳・規則の遵守、などである。

ここで注目したいことは、王は統治の基本理念として用いている Dharma という言葉を「仏教」という限定的な意味で使っているのではないということである。Dharma とは、アショーカ王自らもその人民も、他国の統治者もその住民も、ともに繁栄し平和を享受するために心すべき基本的な真理・法則・道徳・倫理ともいえるべきものである。そこにまた仏教の理想とするものが現れているのである（N. A. Nikam and Richard McKeon, *The Edicts of Asoka*）。

## 6. 法然と親鸞にとっての戦争と平和

上記の議論では、争いを否定し平和を達成するために努力することが仏教の究極の目標である涅槃への道であり、それが「積極的平和」の精神と一致することを明らかにした。浄土教においては、自己および他人との平和の達成が「往生浄土」の道として、より明確に提示される。藤原頼長の日記『台記』によると、法然（1133-1212）が9歳の時に、父・<sup>うるま</sup>漆間時国が敵対していた源内武者定明の襲撃にあって致命的な傷を受けた。時国は死の直前に幼い法然に対して、

汝、さらに会稽<sup>かいけい</sup>の恥をおもひ、敵をうらむることなかれ、これ偏<sup>ひとへ</sup>に先世の宿業也。もし遺恨をむすばば、そのあだ世々につきがたかるべし。しかじはやく俗をのがれ、いゑを出で、我菩提をとぶらひ、みづからが解脱を求めんには。

（大橋俊雄、『法然入門』、pp. 53-54）

と言ったと言われる。「父を殺されたからといって、その恥を雪ごうとして、敵を恨んではならない。これは過去世からの因縁でこうなったのだ。もし恨みを晴らそうとすれば、仇が仇を生んで、将来何代にもわたって争いが続くであろう。だから早く世俗を離れ出家して、私の成仏を願い、おまえ自身の悟りを求めよ」という意味である。これは先に挙げた『法句経』(3)(4)(5)にも共通するものである。

法然にとっては、日常の衣食住の営みはすべて往生浄土の道、すなわち念仏、の「助業」

でなくてはならず、往生浄土を思わないで、ただ身の栄達・権勢・富裕のために行う行為は三悪道（地獄・餓鬼・畜生）に落ちる悪業であった。これについて法然は次のように言っている。

又いはく、現世をすぐべき様は、念仏の申されん様にすぐべし。念仏のさまたげになりぬべくば、なになりともよろづをいとひすてゝ、これをとどむべし。（中略）衣食住の三は、念仏の助業也。これすなはち自身安穩にして念仏往生をとげんがためには、何事もみな念仏の助業也。（中略）もし念仏の助業とおもはずして身を貪求するは、三悪道の業とはなる。極楽往生の念仏申さんがために、自身を貪求するは、往生の助業となるべきなり。（『真宗聖教全書・四』、pp. 683-684）

すなわち、身の栄達・繁栄だけを目指すような生活をすれば地獄・餓鬼道・畜生道に落ちるものになるが、念仏を称えやすくするために衣食住を改善しようとするのは念仏の助業となる、ということである。前者の場合には貪欲・瞋恚・愚痴の三毒が起こるが、後者の場合には他への思いやりも働き、ともに栄えようという態度が起こるからである。心に念仏を持って社会生活を送ることが、平和を構築する原点であると言っているのである。

法然の弟子・親鸞（1173-1262）は、法然の後をついで、阿弥陀如来の本願を信じ念仏すること一つを中心に生活することを勧めた。そしてもともと地獄落ちの自分であることを思い起こせば、たとえ念仏を地獄落ちの業だと非難するものがあったとしても、怒りも起こらないことを述懐している（『歎異抄』第2章）。すなわち争いは自我と自我とのぶつかり合いであるから、自分が「罪悪深重、煩惱熾盛」だと分かれば、争いの基になる自我がその働きを止めるわけである。

しかし親鸞にとって最大の悪は、仏法を誹謗・弾圧する行為であった。1207年の朝廷による念仏弾圧（承元の法難）について、親鸞はその主著『教行証文類』のなかで次のように言っている。

主上臣下、法に背き義に違し、忿りを成し怨みを結ぶ。これによりて、真宗興隆の大祖源空法師ならびに門徒数輩、罪科を考へず、猥りがはしく死罪に坐す。あるいは僧儀を改めて姓名を賜うて遠流に処す。予はその一つなり。しかればすでに僧にあらざり俗にあらざり。このゆゑに禿の字をもつて姓とす。

（『浄土真宗聖典』註釈版、p. 471-472）

ここで大切なことは、法然も親鸞も朝廷の誤った政策に反旗を翻したり逃亡したりせず、従容と流刑先におもむき、そこからより意味のある人生を再構築したことである。「僧にあらざ俗にあらざ」という言葉によって親鸞は、自分を抑圧した相手のそのままを認めながらも、その災難を跳躍台としてさらに大きく生きて行った。こういうところにも仏法は、個人間においても国際問題においても、非暴力によって他と共存共栄を成し遂げる道を示してくれている。

親鸞にとって念仏とは、かぎりなく善に近づく道であった。門徒への消息（手紙）の中の一つで親鸞は次のように述べている。

としごろ念仏して往生ねがふしるしには、もとあしかりしわがこころをもおもひかへして、とも同朋にもねんごろにこころのおはしましあはばこそ、世をいとふしるしにても候はめとこそおぼえ候へ。よくよく御こころへ候ふべし。

（「親鸞聖人御消息」第3通、『浄土真宗聖典』註釈版、p. 742）

この意味は、「長年念仏して、往生を願ってきたしるしとして、もともと悪かった自分の心を思い返して、友や同じ念仏者にも優しい心が起こってくるはずである。それこそが『世をいとふしるし』である。すなわち、世俗の価値を究極的なものと思わず、世俗への誘惑も退けて、縁あるものと共に如来の真実の世界に生まれることを願っているしるしである」ということである。親鸞は非暴力による平和の達成をこのように表現したのである。

## 7. 結び

上に釈尊、アショーカ王、法然、親鸞の言葉から「戦争と平和」に関連するものを拾い集めてきた。これらの人々に共通することは「無我」の実践である。自我を見据えてそれを乗り越えたものが無我を体得することになるが、無我の実践者が争いを起こすことはない。争いが自我と自我の衝突である以上、その自我を問題にして始めて争いが収まることになる。

国家間の争いの場合もこの点では変わらない。国家という集団の自我を具体化するものは政府であり、独裁政権の指導者は個人の自我をもって政府・国家の自我としている場合が多い。しかし民主主義政体の場合でも、政府の指導者たちはマスコミ操作によって自分の自我を国家の自我として認めさせようとする。これは最近のアメリカ政府の政策に顕著

になっている。

仏教で最も重いとみなされる罪は「誹謗正法」と並んで「五逆十悪」であるが、その中でも「殺生」は十悪の最初にあげられている。仏教では命を奪う行為が最大の悪であり、命を助け育むことが最大の善である。従って仏教の立場から言えば、大量破壊活動である戦争は、どのような口実があっても許されないことである。そして個人個人が命の尊厳に目覚め、自らは殺生を行わず、他人にも殺生を行わせないように努力することが、仏教者の生き方なのである。

最後に、2003年10月18日に開かれた宗教倫理学会で、筆者が小論のもとになった論文を口頭発表したところ、「戦争は政治の問題であり、この発表は個人の信教を扱っているにすぎない」という趣旨の批判をいただいた。しかし個人の信教と、その人の倫理観や政治観に乖離があつて良いものであろうか。

そもそも民主主義の原理は、自由な思考をする個人の総意を政治に反映することである。キリスト教や仏教などの世界宗教の第一義は、基本的に個人に働きかけ、個人の尊厳を確立し、個人を苦悩から解放することにある。しかしこれは単に心の持ち方の変化ではなく、その人の生活態度や対人関係・対社会関係にまで影響を及ぼす全人的変革である。それを考えないのなら宗教そのものの存在意義もないであろう。宗教人として戦争防止と平和の増進のために少しでも貢献しようとするれば、自分の信教に基づいた平和観を先ず確立し、それを他人に伝えることから始めなければならない。宗教人であるとともに政治の担い手でもある私たち一人一人がそれぞれの宗教の教えに謙虚に立ち戻って、「戦争と平和」を自分の問題として深く考え、話し合い、行動することが平和への道だと考える。

## 参考文献

A. L. Basham, *The Wonder That Was India*. New York: Grove Press, 1959.

N. A. Nikam and Richard McKeon, *The Edicts of Asoka*. Chicago: The University of Chicago Press, 1966

S. Radhakrishnan, *The Dhammapada*. Oxford University Press, 1977.

大橋俊雄、『法然入門』春秋社、1989.

中村 元『釈尊伝 ゴータマ・ブツダ』法蔵館、1996.

『浄土真宗聖典』（註釈版）本願寺出版社.

『真宗聖教全書 一』

『真宗聖教全書 四』

**キーワード：**戦争と平和、釈尊、アショーカ王、親鸞、積極的平和

**Keywords:** War and Peace, Shakyamuni Buddha, King Ashoka, Shinran, Positive Peace